

当第3四半期連結累計期間（2024年4月1日～2024年12月31日（以下、「当第3四半期」という。）」のわが国経済は、雇用・所得環境の改善が続く中、景気については一部に足跡みが残るものの、緩やかに回復しています。

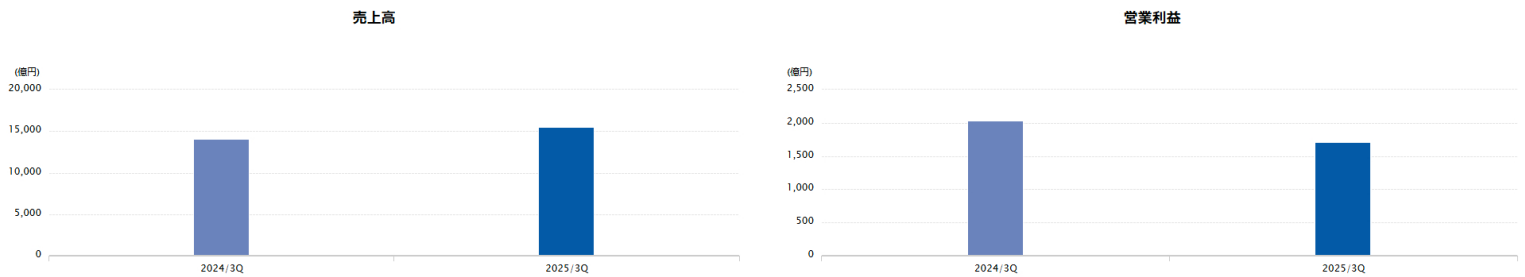
航空業界を取り巻く環境は、ウクライナや中東地域情勢等の地政学リスクが懸念されるものの、旅客需要は回復基調が続いています。

このような社会・経済情勢の下、航空事業を中心に増収となったことから、売上高は1兆7,027億円となりましたが、運航規模の拡大に伴う整備機会の増加や人財への投資を進めたこと等から費用が増加し、営業利益は1,711億円となり、前年同期と比べて減益となりました。また、航空機等に関わる各種補償金や為替差益を計上したこと等から、経常利益は1,815億円、親会社株主に帰属する四半期純利益は1,340億円となりました。

なお、当社は世界の代表的な社会的責任投資の指標である「Dow Jones Sustainability World Index」の構成銘柄に8年連続で選定されました。今後も事業を通じて環境問題等の社会課題解決に取り組み、持続的な成長と企業価値の向上を目指してまいります。

セグメント

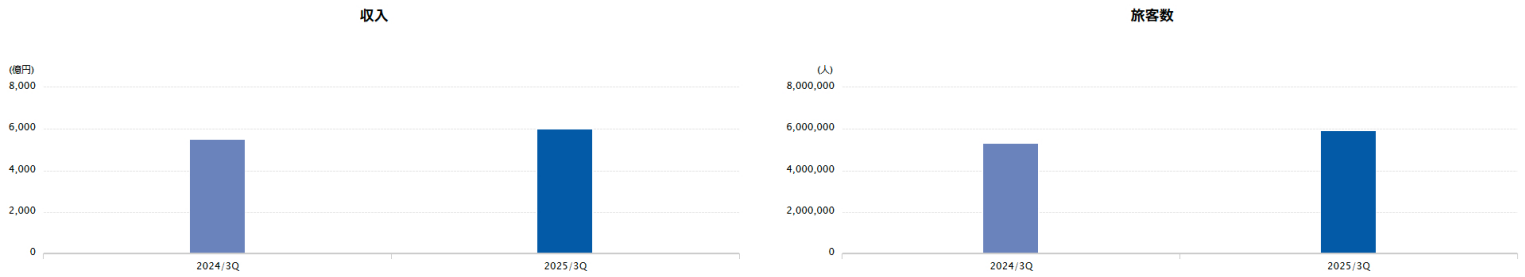
航空事業



旺盛な訪日需要とレジャー需要に支えられ、国際線旅客・国内線旅客ともに好調に推移し、売上高・旅客数ともに前年同期を上回りました。費用面では整備費や人件費等を中心に増加したことから、営業利益は前年同期と比べて減益となりました。

なお、当社グループは英国SKYTRAX社から顧客満足度で最高評価となる「5スター」に12年連続で認定されたほか、米国の非営利団体APEXから高品質なサービスの提供が評価され、最高評価となる「WORLD CLASS」を初受賞しました。

国際線旅客

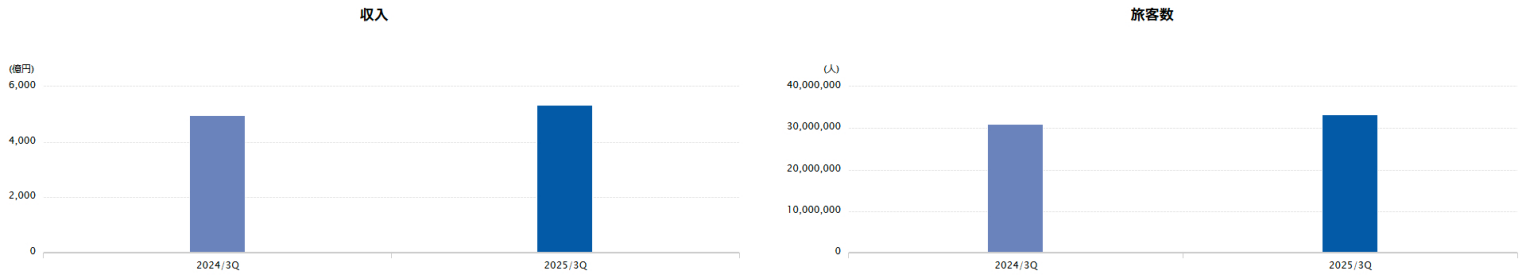


国際線旅客では、好調な訪日需要に加え、日本発のレジャー需要やビジネス需要を取り込み、北米路線・欧州路線が好調に推移したこと等により、旅客数・収入ともに前年同期を上回りました。

路線ネットワークでは、10月から成田＝パース線を再開したほか、12月から新たに羽田＝ミラノ線を開設しました。

営業・サービス面では、10月から一部の国際線機材のプレミアムエコノミーとエコノミークラスを対象に、機内インターネットサービスでのテキストメッセージの通信を無料提供しました。

国内線旅客



国内線旅客では、「ANA SUPER VALUEセール」を継続的に実施し、レジャー需要の喚起と早期取り込みに努めたことや、運賃を一部改定したこと等により、旅客数・収入ともに前年同期を上回りました。

路線ネットワークでは、12月から羽田＝能登線を1日2往復に復したほか、年末年始期間の羽田＝宮崎線や羽田＝沖縄線等において臨時便を設定しました。

営業・サービス面では、大阪・関西万博の開催を記念した特別デザイン機「EXPO2025 ANA JET」の運航を開始したほか、羽田空港のANA LOUNGE内にキッズルーム「ANA ポケモン Kids TV ラウンジ」をオープンしました。また、プレミアムメンバーのお客様の利便性向上を目的に、羽田空港のプレミアムチェックインカウンターにおいて、カウンターの増設や最新型保安検査機の導入を順次進めています。

国際線貨物

収入



輸送重量



国際線貨物では、アジア・中国発北米向け三国間貨物の旺盛需要を取り込んだことに加えて、自動車関連を中心とした日本発着の需要が緩やかに回復したこと等により、輸送重量・収入ともに前年同期を上回りました。

路線ネットワークでは、需要動向を見極め、貨物専用機の運航路線や供給量を柔軟に調整したほか、8月から他社によるエアラインチャーター便を運航する等、収益性の確保に努めました。

また、成田空港において10月から新たな貨物施設の供用を開始しました。施設の集約や無人搬送車の導入による作業の効率化に加え、温度管理施設の拡充等による品質向上に取り組むことで、貨物の国際競争力を高めてまいります。

Peach・AirJapan

Peach

収入

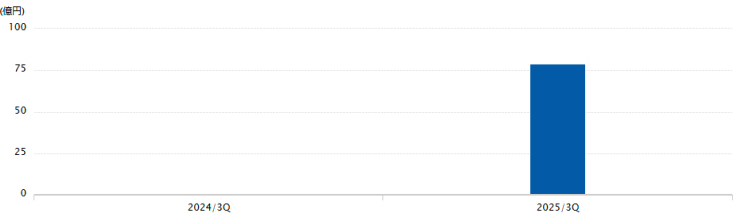


旅客数



AirJapan

収入



旅客数



Peachでは、旺盛な訪日需要を取り込むため、使用する機材を国際線へ重点的に振り分けたこと等から、国内線の旅客数は減少したものの国際線の旅客数は増加しました。また、国内線の運賃を一部改定したこと等により、収入は前年同期を上回りました。

路線ネットワークでは、12月から新たに関西＝シンガポール線を開設しました。

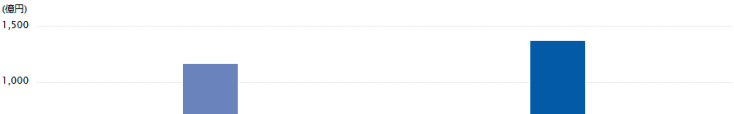
営業・サービス面では、国内・海外の旅行パッケージ商品「Peach Travel」の販売開始1周年を記念したセールを実施し、レジャー需要の喚起に取り組みました。また、12月から機内誌を刷新したことに加えて、機内食の種類を増やし、一部の国際線で温かいメニューを再開する等、お客様へのサービスの充実に努めました。

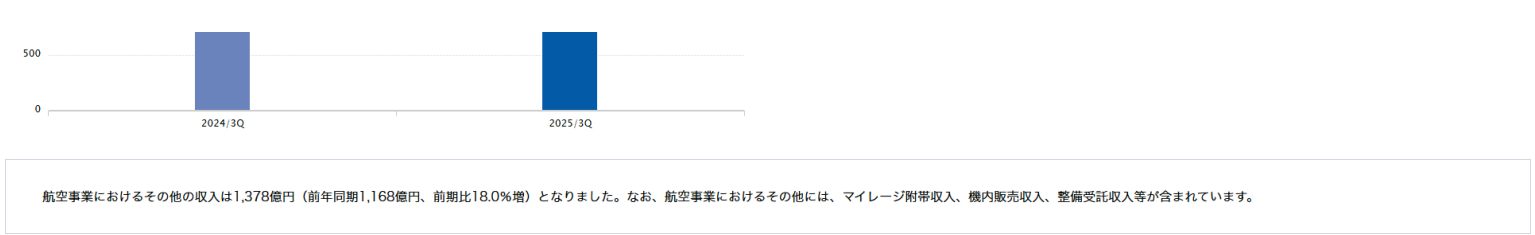
昨年2月に新たなブランドとして誕生したAirJapanでは、成田＝バンコク線、成田＝仁川線、成田＝シンガポール線を運航しています。

全ての就航路線を対象とした「AirJapan Special SALE」を実施し、旅客需要の喚起に取り組んだほか、成田＝仁川線に続き成田＝バンコク線と成田＝シンガポール線の一部運賃において払い戻しが可能となるように運賃ルールを見直しました。

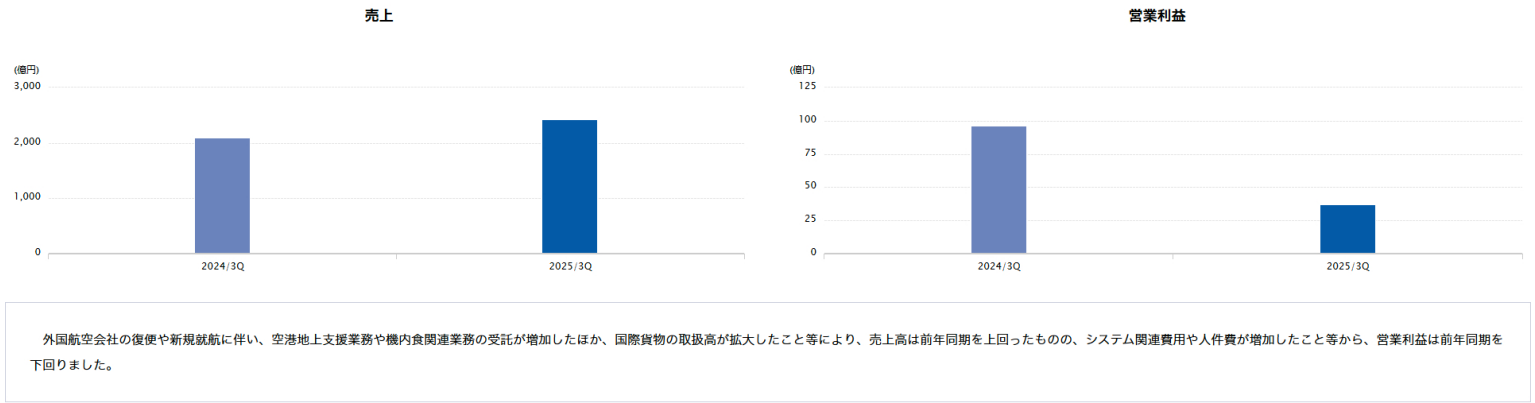
その他

収入

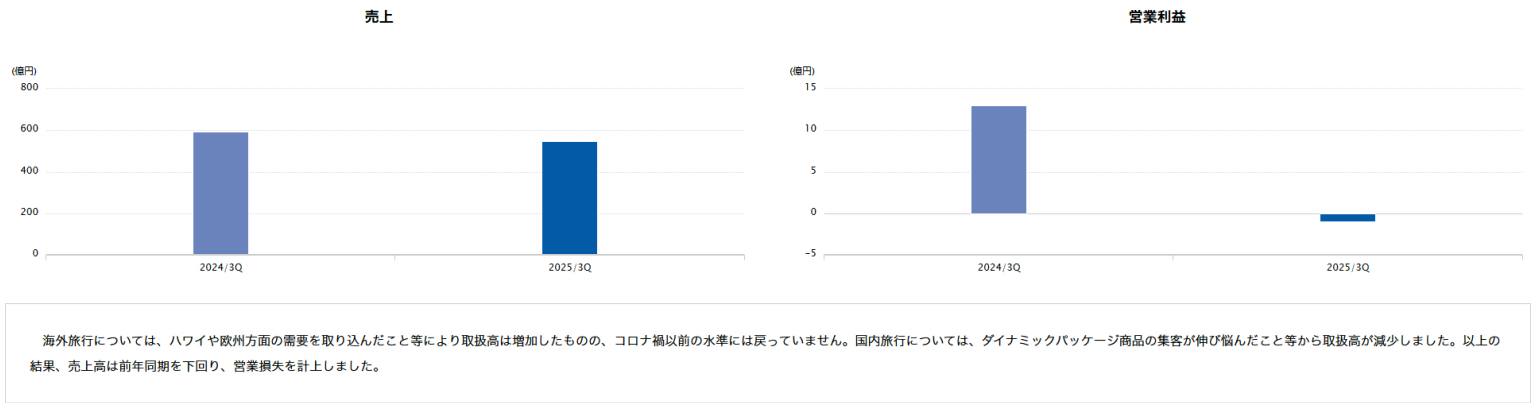




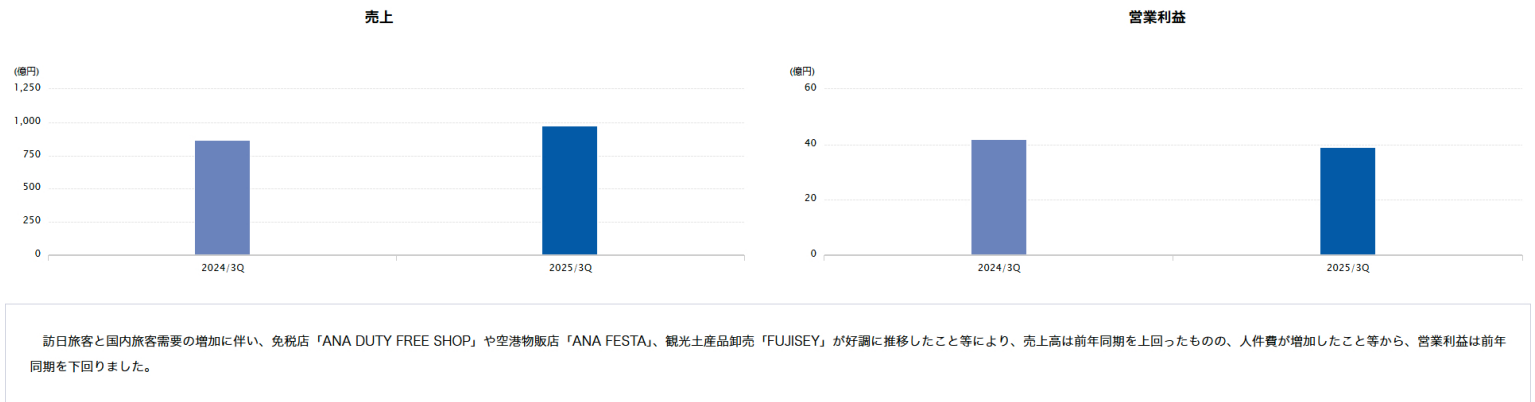
航空関連事業



旅行事業



商社事業



その他





空港設備保守管理事業や不動産関連事業において取扱高が増加したこと等から、売上高・営業利益ともに前年同期を上回りました。

財政状態

資産の部は、有価証券が増加したこと等により、前期末に比べて127億円増加し、3兆5,822億円となりました。

負債の部は、転換社債型新株予約権付社債の償還及び借入金の返済があったこと等により、前期末に比べて839億円減少し、2兆4,329億円となりました。なお、有利子負債（無利子のユーロ円建転換社債型新株予約権付社債を含む）は、前期末に比べて1,244億円減少し、1兆3,595億円となりました。

純資産の部は、配当金の支払いや繰延ヘッジ損益の減少があった一方で、親会社株主に帰属する四半期純利益を計上したこと等により、前期末に比べて966億円増加し、1兆1,492億円となりました。

キャッシュ・フロー

営業活動においては、当第3四半期の税金等調整前四半期純利益1,783億円に、減価償却費等の非資金項目、営業活動に係る債権・債務の加減算を行ったこと等から、2,631億円の収入となりました。

投資活動においては、有価証券の取得や設備投資による支出があったこと等から、4,330億円の支出となりました。これらの結果、フリー・キャッシュ・フローは1,698億円の支出となりました。

財務活動においては、配当金の支払いや社債の償還、借入金の返済による支出があったこと等から、1,585億円の支出となりました。

以上の結果、当第3四半期末における現金及び現金同等物は、期首から3,254億円減少し、6,770億円となりました。

連結業績予想などの将来予測情報

第3四半期（10～12月）においては、旺盛な訪日需要や国内のレジャー需要に支えられ、国際線旅客と国内線旅客が好調に推移しました。第4四半期（1～3月）も堅調な旅客需要が続くと見込まれることから、過期の売上高は2兆2,550億円（前発表時から350億円の増加）となる見通しです。

費用面では為替影響のほか整備関連費用等の増加が見込まれることから、営業利益は1,800億円（同100億円の増加）となる見通しです。また、航空機等に関わる各種補償金が想定を上回る見込みであること等から、経常利益は1,900億円（同200億円の増加）、親会社株主に帰属する当期純利益は1,400億円（同200億円の増加）となる見通しです。

当期の配当予想については、前発表した1株あたり50円から変更はありません。

なお、算出にあたり、米ドル円為替レートは155円、航空燃油費の指標であるドバイ原油の市場価格を1バレルあたり75米ドル、シンガポール・ケロシンを1バレルあたり90米ドルとしています。